



小栗外傳三編

貳

13
3293
14



寒燈夜話 小栗外傳卷之十二

東都

絳山戲編

第二十編

山鬼の魔術女兒を騙して
老僧の念珠怪獸を走らす

本大學出版部

且説夜話の常阿上人と小栗夫婦と徳野山お赴きめまよりの小栗の常
の東國お忍び居る葦お助重の光景を告ぐやと武蔵ある二芳村の
里はうちとちて下総の方にて候きと往く結城の里お至りたる此辺お
小栗の所業と忍ぶより一火受けの暫く此地お逼留し人々の行状
搜索く此地方へ往く城お朝の居城めて山川の便よく珠お持朝の政
正しく民豊み賑ひぬ爾も茲よ一件の奇事ありそとらうめとらふ
困守る持朝一人の女兒とてその其名を白糸姫とて呼びぬ今年十七

容貌比なく。いと魁靡なり。父母のいふまゝみおろさぬ。は才親友全の者
 なく。その要をばいと深国母のひく。人の中も見入させたり。はるの季秋
 の下旬一夕風雨晦冥中にて。驛にかりしが。忽ち白糸姫の去向を知らず
 形りぬ。持綱夫婦もどつて嘆き。人と四方おちらして。捜索あれども。さらさら知ること
 なし。あまりのに索かき。ト並の博士を請う。トあらとふ。上は老いて云。これ
 人間のつぎさうらぶ。妖魔の所ありて。此より戌亥の方にくも。姫人をまじ
 まらぬ。いふまゝ命をばしとらひ。十日も過ぎ。あつた。是れは速く捜索
 ろ。之。速くせが悔とも甲斐なき。とやとせ。お持綱これとて。易うなる。お
 ちひ我若も一城の主として。鎌倉殿の外藩と。今妖魔の為にお女見ん
 春あつると。其武威拙く。平士も劣まり。斯てい。軍と持綱の任。人
 昔深義家。鳴弦をく。不怪異と。退治。源三位頼政。闇夜。越と別て

君の心悩を易ん。と。なれり。我武彼支。お及らぬ。も。你困よ。ある女見と。奪集を
 る。と。あつと。徒ふる。え。や。奈何なる。天魔あても。あれ。此能。報の。あ。れ。る。と。
 それより。士卒を引。俱一城。より。乾方。日。く。捜索。とも。それ。と。定。う。廿。年。さ。る。と。
 朝より。夕。至。り。山谷。の。厭。なく。奔。走。する。と。る。と。徒。お。日。次。過。し。ま。り。さ。く。お
 下。世。国。山。石。舟。山。とい。ふ。隣。國。さ。ら。結。城。と。程。も。近。く。持。綱。の。願。ふ。と。
 此地。方。の。結。城。の。乾。も。當。り。く。持。綱。彼。を。尋。ね。と。健。中。の。郎。堂。と。撰。
 故。十。人。と。將。く。彼。山。に。上。り。終。日。尋。ね。求。れ。と。白。糸。姫。の。去。向。を。知。こ。は。し。其
 日。も。既。ち。暮。ん。と。し。金。烏。西。に。傾。け。夕。霧。山。隈。に。朦。朧。と。た。ち。籠。へ。は。け。ぬ
 對。ひ。の。峯。お。樓。閣。の。彷彿。と。して。人。を。持。朝。と。れ。を。望。み。て。いと。不。定。今。日
 終。日。此。山。を。尋。ね。し。ほ。れ。ども。一。軒。の。白。屋。さ。も。か。ら。ぬ。目。今。此。樓。閣。を。入。る。と。怪。し
 々。れ。似。ま。れ。往。て。え。ん。や。と。谷。よ。下。り。崖。と。攀。ぎ。樓。閣。の。在。り。妙。と。至。れ。ぬ。心。ら

消く痕も好し。その妖怪も欺られぬと噴るといふども詮さへし。猶昨日の既ぬ
 暮て士卒も疲勞なれぬ。斯て物の用も乏かじ。今夜の士卒も疲勞を
 明且に至るが尚人數を倍して此山中に待はし。妖魔を獲て今日の退恨次
 暗さんと麓の方へ赴く。忽然として一人の僧も出遭する。身が括胡が馬前
 進て金頭首してやと云う。貧道は彼正なる谷間も居る老僧が徒身も
 とらぬ。只今師の申すに。今日相公の山中も待らぬ。日暮るに恨み下
 速く行く。庵も遠くせよと命は付る。此山もあつた。今も持括
 不審ていらぬ。汝が師は何等の人ぞ。我悩めを知らず。汝はたも。俚回意
 けら。今もあつた。せよ。道行の師が名を申陽とて。各軍に厭ひのる。世の
 たぶと手ひと嫌。此山中は菴と常人間も交る。せよ。只仏道三昧も光陰
 送りの。爾らもいふ。自らを心懸して草庵の裡に在る。今も里の

外のことほども知りぬ。相公の此山も。今も昨夜既ぬ。知りぬ。今も。心懸
 らぬ。知る。かたりの。浮屠氏も。これ。國守の。恩。い。と。兼。畧。も。な。す。
 と。ま。よ。り。て。多。道。も。命。も。と。途。も。も。る。の。露。疑。ひ。も。も。て。師。が。意。を。果。は。さ。し。又。
 と。懸。中。は。へ。る。も。ぞ。括。胡。也。び。く。さて。塵。世。の。俗。も。厭。ひ。の。山。中。も。陰。れ
 何。道。彼。ら。み。だ。れ。俚。う。も。爾。れ。れ。の。俗。も。好。し。我。を。款。待。芳。志。は。足
 たり。も。ぞ。う。空。志。う。好。も。び。き。し。も。案。内。を。好。も。と。信。を。前。も。せ。行。年
 二。所。も。り。ゆ。て。忽。ち。一。坐。の。大。松。の。下。も。知。り。其。例。も。柴。門。の。り。薛。羅。也。
 纏。り。れ。ど。甚。困。雅。も。り。木。奥。の。声。谷。神。も。響。音。も。寂。寥。も。り。俚。ひ。一。傍。
 括。胡。を。門。外。も。と。も。お。の。れ。前。も。入。り。し。程。も。木。魚。の。声。も。み。庵。主。と。見
 志。き。老。僧。の。身。も。深。の。法。衣。を。穿。ひ。も。水晶。の。念。珠。も。摘。り。門。外
 也。と。括。胡。首。一。貧。道。則。ら。菴。も。申。陽。も。て。此。山。中。に。俚。こ。と。既。も。十。年。の

及び願うの恩を直する事曰。適相公今日此山中狩り多し日暮宿せ
 る方好く。さて恨ましくおぼしき事と存じぬ。徒らとて草庵に近
 せり。自ら迎へて。老翁の歩行自在なるがゆゑに。
 此無れを故し。多し此山中一夜を明し。あれと懇小僧へ。持胡老翁の
 徳ありげなるが。忠申す。この夜喜ひ老師の宜へば。日暮不知
 案内山中殆ど多し。及び小芳志より。今夜を易く明さんといふ
 事。さあり多し。申陽うら笑ひ。這行いと前ま。一室中清し。酒飯を
 出し。主従を款待。持胡これを謝し。其後菴主對ひ。其某今日此
 山中狩り。鳥獸を獲る。うら。我一人の女兒のあし。此れと妖怪の
 多し。春なれ。その去向を知り。此山中のあし。朝より夕に至る
 まで捜索し。此のまが。室く山とわらんと。夕霧を

菴より。裡小樓閣をえは。怪しと思ひ。を極人と。溪に山と。今
 せ。亦小至ると。とねの。影とも。は。是必と。妖怪の。存せられ
 女兒を。彼怪物の。まさ。老師。此。回しく。任。すけの
 妖怪の有。社。知りて。お。我。あ。説。し。福と。あり。申陽。目。被。あ
 前。あり。我。此。地方。あり。十年。あ。ま。れ。い。ま。と。妖怪。あ。り。か。ま。ま。と
 系。此。地方。の。靈。地。あり。て。神。仙。控。記。の。下。今。日。又。を。か。る。示。の。樓。閣。の。仙。人。の
 控。戲。あり。と。る。仙。の。素。人。と。害。せ。と。い。う。て。姫。人。と。棄。れ。の。り。あ。り。今。我。の
 此。庵。の。仙。の。舎。の。本。の。れ。が。姫。人。の。去。向。を。問。ふ。相。公。忍。び。居。る。仙。の。言。う。て
 笑。ひ。め。せ。ぬ。と。其。事。を。知。る。之。仙。の。舎。の。少。の。奇。怪。を。こ。ん。ま。め。し
 雨。の。り。も。露。騒。じ。の。ひ。そ。い。あ。持。朝。さ。る。り。や。と。い。ひ。其。言。お
 事。し。評。堂。の。奥。より。う。ら。忍。び。持。胡。の。之。次。の。間。居。る。り。け。

初く夜も更闇て二更もなほと思の外方お人のすまのけしひまればい
 る仙人やと拵紙門の隙より窺ふが徒ま燭を照して出立お先一挺の
 雲をかた入る。雲の圍ゆる七八人の異貌女性陪徒なり。かくて雲の戸を固めて立
 出るとえふ此日以をそとと搜索する我女兒の白糸なまはすのくいふと
 驚きまゝ立出るとまゝしり前へ庵まの戒められた浮動をとおまめ尚こと
 窺ふが怪しいお庵まの傍まの徒まお容容貌みる傍のししお耐庵ま
 法衣を脱ぎて白糸が側にお伏せおてや酒りて身よ今夜の良肴はごらお夫
 さんおとらおりも瓶子盃拵り物。其跡より大きおる組板に裸躬る人を
 上へ昇りておろしこれとるお我即堂お似たり。こまおひるおひるおひるおひる
 香ての裸躬るの肉を切て肴にし飽きてお飲食ひ酒ま十分おる耐庵ま白糸が
 身をとめて云かうの我お獲る今日既お七日に及べり。其間まおお説き
 されど我も夜せまて今夜の是非は枕席をとりあさて若固辭とらるおは
 りて組板の入りおるぞくせ見且お父拵紙も我神通をりて此お母も種ま
 くれをさへ命とらるんぞおふとらるよ命を誰や否と追々拵紙戯んこと
 白糸双手おりておの拂ひ涙をたらと流してお奴家お世の作業悪く
 ま。妖獣のあま獲られ此地おふまらるるも甚ま念おかりおおおいりて
 おと枕席を共よとらるおや此おの甲斐おん女まおおお命をたらとらるる
 父の名おあお下総の結城の珠お主らるる矢の道おいと賢くいつせお人
 何条お方りて傾けりとおおん妖術をりて父上を此おおまおおせし
 奴家を欺く虚言をらるんいふお心をそととも妖魔のたあおおおお
 殺まらるる速も殺まらるる言怒りく罵りけり。庵まお怒り我壽五百歳お
 及び神通既お成るおの欲する知らるるおお。今お一女子おお意

されど我も夜せまて今夜の是非は枕席をとりあさて若固辭とらるおは
 りて組板の入りおるぞくせ見且お父拵紙も我神通をりて此お母も種ま
 くれをさへ命とらるんぞおふとらるよ命を誰や否と追々拵紙戯んこと
 白糸双手おりておの拂ひ涙をたらと流してお奴家お世の作業悪く
 ま。妖獣のあま獲られ此地おふまらるるも甚ま念おかりおおおいりて
 おと枕席を共よとらるおや此おの甲斐おん女まおおお命をたらとらるる
 父の名おあお下総の結城の珠お主らるる矢の道おいと賢くいつせお人
 何条お方りて傾けりとおおん妖術をりて父上を此おおまおおせし
 奴家を欺く虚言をらるんいふお心をそととも妖魔のたあおおおお
 殺まらるる速も殺まらるる言怒りく罵りけり。庵まお怒り我壽五百歳お
 及び神通既お成るおの欲する知らるるおお。今お一女子おお意

海を渡る物か。はしりの杉棚堪う移て。たぢくとして目づるめき。髪付あは
 を失ひしが。その仕換は。惜と。乞を。励まう。目次。聞か。今また。あり。妖鬼
 も。影。庵も。女児も。消失。て。岩。石。累。く。洞。穴。か。て。夜。の。ほ。の。く。と。明。か。け。を。
 杉棚。奇。異。の。思。ひ。と。い。も。ま。つ。こ。妖。魔。を。騙。され。杉。取。を。こ。つ。つ。う。ね。と。公。中
 噤。ると。い。と。詮。方。形。く。即。意。木。を。い。う。み。と。其。を。こ。と。捜。索。う。に。洞。穴。の。外。に。山。岩
 間。み。夜。夢。り。て。郷。め。られ。居。り。ぬ。中。ま。き。入。の。即。意。木。か。ん。と。あ。い。ぬ。方。あ。と。と
 四方。と。顧。ふ。遙。き。る。処。は。五。骸。断。く。ま。ら。ず。死。に。た。り。の。あり。杉。棚。熟。く。う。め。此
 即。意。木。昨。夜。組。極。か。上。し。られ。け。り。の。こと。措。き。て。念。念。浮。揚。う。う。郷。ら。れ
 即。意。木。を。解。救。し。昨。夜。の。光。景。を。物。語。り。即。意。木。は。涙。を。流。し。て。い。殿。様。か。う
 お。ど。し。は。い。ん。と。さ。が。り。我。も。と。昨。夜。徒。牙。ホ。事。り。二。室。に。付。ひ。酒。次。勤。め。い。い。が。
 不。思。議。也。と。の。酒。を。飲。と。均。く。渾。身。擦。働。く。り。付。と。と。叫。ん。と。と。い。れ。り。声。出。せ。

と。く。鹿。角。さ。る。う。ち。三。四。人。猿。か。似。る。傳。入。す。て。杉。の。と。く。郷。め。杉。某。と。牽。を。ま。り。い
 其。後。殿。の。赤。く。と。呼。ぶ。声。の。ま。へ。れ。と。声。生。ま。れ。か。回。夜。中。今。曉。か。及。ひ。衝。く
 酒。の。碎。醒。を。い。れ。が。斯。言。語。こ。ら。な。せ。と。い。何。れ。高。年。生。の。こ。こ。く。な。ら。ば。と。い。え
 う。杉。棚。こ。も。こ。は。使。て。毎。念。ま。る。と。い。く。も。妖。鬼。が。不。行。の。ま。り。が。く。一。先。遣。お。還
 人。數。を。傳。し。再。び。ま。ら。そ。女。児。を。取。戻。し。此。儀。を。報。る。と。夫。より。士。卒。を。引。退。將。
 る。人。と。し。て。馬。を。捜。索。す。洞。穴。より。二。丁。を。り。の。下。に。其。を。鞍。の。ま。り。て。馬。を。い。ん。と。
 こ。も。こ。と。人。奪。れ。ぬ。と。恨。骨。髄。徹。し。齒。切。を。ば。て。山。を。り。り。城。中。に。還。り。累。世。の
 老。當。意。木。を。集。め。山。中。の。光。景。を。物。語。妖。鬼。を。討。つ。術。を。織。々。傳。へ。付。一人。の。老。當
 を。み。出。す。き。り。の。は。い。今。東。國。の。ち。か。殿。の。弓。矢。子。傳。人。の。り。こ。も。さ。え。く。雨。お
 彼。山。に。居。る。妖。鬼。欺。死。騙。し。と。い。は。い。何。と。大。に。殿。様。を。斯。の。こ。じ。い。う。て。化。へ
 の。か。り。て。制。さ。る。こ。社。の。ん。昔。より。妖。鬼。を。討。め。神。力。に。助。か。あ。く。と。その。功

成がに足すよめて小臣思ひはく、この近世東國におもく、生著薩と人乃
 其の敬む相種國を以て行上人の事を近世此城下におもて
 旅宿りし近世の民を誨なせり。其科を父くふ沈痾はさらなり。妖祟亦いぢま
 ころの一回上人の加特を稟ての故、舟を以て火害を除く。牧筆よるる、皇は殿
 上人を頼まのり、姫人の心才恙なく、還すまさんて疑ひは、明日速く上人を
 城中へ招きめれしと、夕へ上る村朝誓射考くも、じりぬが、海あつて真ふ
 あへ汝が練実不雨り。上人のこと我も知すの、明日これ招くまごもは、今こそ
 上人の旅宿に往懇頼まさん、汝案内をば、俄小舟人を信徑、行
 上人は旅宿に赴きたり。茲は、汝の常河上人へ去比る、け結陣、おすり小栗
 助重が郎黨の去回と搜索、お池庄司後、友舟のまか連つて、其死の人を
 還今を庄司木の二人の土君の難病をば、迅まきとく、今保せん、と相談して、上へ

お別れ、死告人と此知よまれる途、おと見、加賀片岡の足舟お生合、一え
 主人の身れ上と、結り、おと、おえ、俱お老阿上人の旅宿よす、り、年と、後人と
 せ、お土民ホ十念秘符をを、と、陸續して、上人の旅宿、お群集、いと、喧く
 せ、お年、お及、おて、お悉、お緒、おの人、お去、お次、お村、お居、おり、日、お中、お西、お傾、おく、お以、お湯、おや、おく、人、おも
 教人と、おと、おる、お付、お徒、お者、お多く、お俱、おし、おれ、おの、お旅、お宿、およ、おす、おの、お案内、お以、おく、常、お阿、お上、お人、お
 人、おま、おを、おと、お徒、お舟、おと、おま、おを、お告、おは、お上、おと、おれ、おと、おし、おと、お信、おは、おし、お人、おが、おえ、おん、
 面、お猿、お似、おと、お身、おの、お道、お服、おが、お穿、おて、おの、おま、およ、おの、おる、お武、お士、おの、お入、お道、お志、おは、おる、おと、お見、
 たり。上人、おゆ、お方、おより、おと、おゆ、おれ、おの、おれ、おを、おな、おと、お云、お某、お下、お野、お國、お岩、お舟、お山、おは、おは、
 りの、お今日、お此、お事、おある、おと、お上、お人の、お慈悲、おと、お願、おが、おあ、おひ、おたり、おその、お本、お何、おと、おな、おれ、お
 今夜、お此、お地、おの、お願、お主、お結、お陣、おお、お上、お人、お見、おと、お見、おと、お岩、お舟、お山、おは、おは、お同、お
 び。其、お府、お上、お人、お有、おと、お出、おと、お彼、おと、お助、おけ、おひ、おも、お上、お人、お有、おと、お出、おと、お終、おら、お我、お眷、お属

悉く亡び去り。此の能く死する生く世々上人の鴻恩を亡きせむと
 笑へる。上人これをみてと不審。搥子と指眼を因り。夢付記念して居り
 るが忽ち双眼及びけれとこと白眼大喝一声して曰汝畜生邪惡と擅し
 人を欺くこと何ぞ其まじき事乎。犯せし罪と悔志氣をあらためて告げ
 助けて佛神を乞ふを以て犯罪と宥人よと云ふもあらず。今此の事や
 我と懸れ國守に仇せん。これ尚ほ罪と悔ふあらずや。と其志氣を
 改めよ爾を以て我汝をして永劫奈落に沈まさんと。奈何畜生よ何や
 と責うけく。罵ると頭を揚ぐ。嘲笑ひ膝を屈し。腰に腰めておちり。我
 逸樂をせんが故に何ぞを改めて木石の如く世に生ん。我も術あり。故
 さうくは坊も思ひ知し。中さんと立揚らんとする処をたぐる念珠を
 上へ畜生の妖術除陀の正法と奈何と。とと拍のうめく。由めりけ成

入道の才一縮とかなうと思ふ。猛り年行。猕猴と交へ。一声を叫び
 逃去れ。其徒者みお猿も変じ。獅子など散らぐ。何方をもおく
 逃去り。上人の徒者これをいんと愕然として驚えは。上人對ひ彼を
 足何等の妖物かと何の害と云ふ。と云ふと不審。因り怪し。道理
 かり。彼を攫といふ獸も。猿五百歳を預るとれば。則攫よなれ。その色
 蒼々として社人の行く行善人を攫持ま。と告げ。貯故とて攫と謂へ。と
 純社もして北好。故ふま。攫父と名づけり。されば人の婦女を攫てこれと
 攫て子を生むといへり。近は此地の領を結城持朝の息女好魔を攫れ
 せ。去向をまじきと云は。今のお攫の奈むい。と云ふ。持朝の世は。勇
 那の女児のみよ山獵せし。妖獸は惱まされ。此の事す。て法を乞ふことあらん
 攫と云ふこれを知り。逃れざるを告げし。我を殺さるる。と人々を惱まし。世は



持朝

旅亭
の

常阿上人
の

結城

持朝

Red seal impression.



小野卷六十一

Small vertical text on the right edge of the page.

害のる。去田生い。で助。をせん。持朝。其のま。法を教。彼畜牛を除。
 志。びべ。と。説。示。の。徒。牙。ホ。を。め。其。妖。悪。の。獸。を。知。り。師。の。道。徳。を。
 感。稱。せ。り。斯。る。所。は。旅。宿。の。門。外。開。一。國。守。の。入。る。と。保。正。本。を。初。奔。を。
 常。阿。上。人。も。徒。牙。ホ。を。俱。して。門。外。に。立。出。て。持。朝。上。人。を。て。れ。を。做。せ。じ。
 常。阿。上。人。も。慌。忙。を。回。り。相。と。ゆ。き。の。故。り。て。貧。道。の。旅。宿。へ。い。せ。
 ろ。事。わ。く。は。諸。人。を。召。さ。し。ま。ま。と。や。こ。い。れ。道。徳。の。聖。を。招。き。ま。し。
 こ。と。い。と。畏。一。頼。も。ふ。事。れ。侍。り。裡。外。伴。り。多。く。の。れ。が。い。ぎ。ま。を。侍。入。れ。
 中。賓。主。の。堅。定。り。て。后。持。朝。上。人。の。上。人。此。地。方。へ。杖。を。曳。ま。り。て。さ。く。お。
 必。り。侍。入。り。と。塵。俗。の。ゆ。勢。を。隔。られ。相。見。と。る。と。一。日。こ。と。を。う。ち。近。日。
 最。愛。め。て。は。女。兒。を。妖。怪。の。ま。り。奪。取。と。な。れ。が。此。正。彼。正。と。索。め。お。違。な。く。
 そ。の。ゆ。ゆ。き。を。洗。穢。れ。今。日。は。旅。宿。ま。り。お。り。こ。と。海。度。を。も。票。と。く。且。を。

女。兒。を。奪。取。ひ。妖。鬼。を。降。伏。し。女。兒。を。再。會。せ。ん。と。妖。頼。を。ち。り。せ。ん。が。為。り。と。
 述。な。れ。常。阿。上。人。ら。ち。臨。命。い。く。之。辞。や。ま。ん。姫。人。を。奪。取。る。鬼。今。日。既。ま。の。
 旅。宿。ま。り。相。公。の。多。道。が。力。を。借。ん。と。志。り。を。妨。ん。と。彼。畜。生。に。が。咄。目。欲。ん。
 權。中。人。民。を。懼。ま。り。て。樂。と。と。如。邪。の。妖。獸。攘。り。か。い。火。き。彼。を。五。百。歳。を。
 經。一。猿。も。く。獲。と。り。て。粗。神。通。を。得。は。れ。も。佛。力。を。借。ふ。い。う。て。討。さ。る。ゆ。の。
 火。き。相。公。彼。惡。獸。を。退。治。し。ま。り。姫。君。を。救。ひ。ま。り。の。み。め。の。は。并。く。人。民。を。
 救。め。り。彼。が。惡。行。民。の。嘆。き。少。く。と。相。公。國。守。お。在。ま。る。民。の。害。を。除。
 終。る。其。任。に。貧。乏。ま。と。衆。生。を。濟。度。と。る。勤。り。謹。む。國。守。の。力。を。た。と。け。
 ち。も。せん。疑。ひ。の。ゆ。で。貧。道。が。言。語。を。用。ひ。ま。り。と。多。め。り。が。持。朝。悠。悠。と。し。て。
 貌。を。改。め。我。然。と。速。に。願。掌。の。り。と。感。謝。と。る。や。侍。あり。上。人。の。教。い。う。く。
 疑。ひ。ち。も。と。ん。き。女。兒。を。奪。取。ひ。妖。怪。の。神。通。と。る。が。じ。と。老。舟。山。ゆ。て。の。

辨うくを詳お説話さす。上人さぞひはく人明日彼を討多らんとなん心
 剛力強きりの十人ぞりて俱相公と女性の姿打多らん相公の
 かくを攫知らしめばたをさそ彼かりとある集ひる婦人多く侍らんま
 運子細を同る爾あれ彼眷属少き術めり力を変とて女とをさ
 るもさく人其耐此鏡を照さば。いづる術をうさとも淺よりる欺欺くこと
 かうふは。既中て危き心のりもあふ。此秘符を投下り身難自在さ
 容易退治し多らん疑ひは貧道又此下居て祈念をば相公の力
 かけをもせん。一面の宝鏡と。数十符をよひまお持初うくまひの
 謝され上人再びさりのたれ。岩舟山へより近づくれば相公の
 うちの人ぞ。彼妖獸とよく知りてらん彼れあても此謀と知らん
 做らざるのみ。中く害及出さん。これを奈何はしめとめり持初
 我此の心はつやうれ直つとて。彼の僂子あてめれば。定我即
 知りてとらん。更おまこと足ゆを悩らる。

第九編
 九傑 遠慮 良將 を助く
 三囊 奇計 妖擣 を伏と

且説その時。屏風の後より。二人の漢子踊出持初の前。首を
 俱しめられし。持初驚ひて。これをえり。其骨相凡ち。但
 士とて。されが。子細を問んと。上人二人を吃さし。こ
 思ふ。當國の。持初とて。あんと。あよ。まど。斯
 の。漢子。平伏し。し。小臣。亦。必。守。に。由。緒。の。り。の。め。り。ん。が。這。回。の。は。伊。弉。と
 望。ま。し。と。し。あ。持。朝。河。り。我。汝。亦。を。知。り。し。ら。那。ら。り。の。も。さ。ん。の。又。は。後。者
 小みとて。各武謀代の。は。あ。て。と。る。縁。故。め。く。我。ら。助。重。の。は。ら。成。兄。を。後。者

兵助もさると云ふを大八郎高次と申結城名武の原足一家の親とてをりて
 由緒はとて父へ上り。今彼亦もて承継る。妖鬼退治の仕儀も、惱まぬとて
 忍びて仕儀の事、望まふにじり。我々妖鬼、多うに家へ入るるもの
 心、幸ひに此仕儀を仕果すとて、其山好むをりて、主君助重の身は、
 頼まぬとせん。とて、常阿上人を頼んで、上人も、父へ上りて、
 思ひこめて、速うもぞ。上人も、其志を、憐れむ。いづれも、父の志、
 傳へ二人、このは、このは、このは、このは、このは、このは、このは、
 いまぞ、知らしめて、我朋輩、既九人、すて、此亦、集會り。尚、
 是采、さくおぼと、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
 二人の者、此、前、も、憚と、夫、然、る、拳、勅、れ、り、畏、ら、れ、と、彼、亦、忠、義、の
 士、あ、て、今、王、の、為、相、公、も、父、へ、上、り、の、は、ら、う、く、月、の、罪、を、忘、て、こ、れ、乃、之、
 彼、亦、が、望、望、を、救、し、妖、怪、退、治、し、の、り、入、り、て、堂、を、覆、り、易、く、り、あ、ん、と、
 ゆ、ら、た、柄、細、微、矣、某、此、亦、も、上、人、の、教、を、受、ん、る、り。其、席、は、て、我、
 對、し、て、の、れ、れ、と、い、て、答、め、と、い、ん、其、某、が、力、を、助、ん、と、い、の、り、と、や、そ、も、く
 何、れ、と、我、お、父、人、と、い、る、り。彼、の、や、り、稱、と、い、る、り。常、阿、上、人、席、を、辱、め、
 時、ま、う、く、人、の、い、ろ、き、永、也、語、れ、と、い、ど、も、其、縁、故、を、し、き、く、彼、亦、が、
 と、い、う、孫、が、を、履、歷、と、述、べ、と、い、ん、く、ひ、て、相、公、も、知、れ、い、く、小、栗、助、が、父、
 満、重、と、前、年、一、色、淫、秀、が、み、い、諷、害、せ、ら、れ、ん、助、重、と、い、を、を、念、お、ひ、
 復、館、去、の、り、の、謙、會、を、赴、き、し、よ、く、途、途、に、横、山、を、押、通、れ、許、娘、也、照、天、と
 婿、一。其、后、横、山、が、毒、計、中、ら、ん、き、を、お、れ、を、猜、し、て、妻、婦、を、從、脱、
 追、人、が、と、て、これ、と、戦、ふ、ま、ぎ、れ、照、天、が、去、向、を、失、ひ、主、從、十、人、我、が、寺、
 事、り、が、横、山、が、害、を、避、ん、と、死、し、は、ま、孫、と、彼、を、欺、き、と、後、一、色、を、付、

兵助もさると云ふを大八郎高次と申結城名武の原足一家の親とてをりて
 由緒はとて父へ上り。今彼亦もて承継る。妖鬼退治の仕儀も、惱まぬとて
 忍びて仕儀の事、望まふにじり。我々妖鬼、多うに家へ入るるもの
 心、幸ひに此仕儀を仕果すとて、其山好むをりて、主君助重の身は、
 頼まぬとせん。とて、常阿上人を頼んで、上人も、父へ上りて、
 思ひこめて、速うもぞ。上人も、其志を、憐れむ。いづれも、父の志、
 傳へ二人、このは、このは、このは、このは、このは、このは、このは、
 いまぞ、知らしめて、我朋輩、既九人、すて、此亦、集會り。尚、
 是采、さくおぼと、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
 二人の者、此、前、も、憚と、夫、然、る、拳、勅、れ、り、畏、ら、れ、と、彼、亦、忠、義、の
 士、あ、て、今、王、の、為、相、公、も、父、へ、上、り、の、は、ら、う、く、月、の、罪、を、忘、て、こ、れ、乃、之、
 彼、亦、が、望、望、を、救、し、妖、怪、退、治、し、の、り、入、り、て、堂、を、覆、り、易、く、り、あ、ん、と、
 ゆ、ら、た、柄、細、微、矣、某、此、亦、も、上、人、の、教、を、受、ん、る、り。其、席、は、て、我、
 對、し、て、の、れ、れ、と、い、て、答、め、と、い、ん、其、某、が、力、を、助、ん、と、い、の、り、と、や、そ、も、く
 何、れ、と、我、お、父、人、と、い、る、り。彼、の、や、り、稱、と、い、る、り。常、阿、上、人、席、を、辱、め、
 時、ま、う、く、人、の、い、ろ、き、永、也、語、れ、と、い、ど、も、其、縁、故、を、し、き、く、彼、亦、が、
 と、い、う、孫、が、を、履、歷、と、述、べ、と、い、ん、く、ひ、て、相、公、も、知、れ、い、く、小、栗、助、が、父、
 満、重、と、前、年、一、色、淫、秀、が、み、い、諷、害、せ、ら、れ、ん、助、重、と、い、を、を、念、お、ひ、
 復、館、去、の、り、の、謙、會、を、赴、き、し、よ、く、途、途、に、横、山、を、押、通、れ、許、娘、也、照、天、と
 婿、一。其、后、横、山、が、毒、計、中、ら、ん、き、を、お、れ、を、猜、し、て、妻、婦、を、從、脱、
 追、人、が、と、て、これ、と、戦、ふ、ま、ぎ、れ、照、天、が、去、向、を、失、ひ、主、從、十、人、我、が、寺、
 事、り、が、横、山、が、害、を、避、ん、と、死、し、は、ま、孫、と、彼、を、欺、き、と、後、一、色、を、付、

そのいんぎ ね ちかす ときり ちかこ
とらふ其便宜を以て移る時に至るを待んとて即ち東國に忍びしを
一色が動静を窺ひしを牙の三列に忍び居るを法則を以て墨する万長が
女児を懸懸せしれ止しおく彼が許不入贅せしお不忠義も毒の照天丹
再命し遂に青墨とまの國を以て少らんと函領ふまじり付万長が女児
の怨鬼を祟られ不図悪徳を直して立と成るを殆死んせと祝する
の告げよりの車よあして慈深山の温泉に赴けぬと首よりの尾に至るや要と
摘ぐ物結りかていやく小栗を病平愈の后能く一色詮秀が許
るべき便宜を好さしめりこれよ上とては恩のあじ貧道小栗がためお
心を用ゆることば不審ゆ少くれとさる世の因縁やいひらん小栗ま娘が身
の上ふまあんとする付ら必と祝音大士を考るよ仏勅のいふありと語を
定てお初まきお感で孝といひ忠と云揚ひも揃君はらる小仏のさるる

冥助あるりのいので奉意を遂げらん我又謀を以て一色を故き鎌倉の村に
おとられが年期をさるる志氣を遂げし久今孰く詮秀が光景をらんお
偏使を遣ふとて君を惑し已持柄とて驕奢を擅おし賢を妬み悪を
漫り己お溜りのの進ま。溜るりのの退くむ邪惡翫高お詔を
あつれが士民これを傍を法士の愁訴をなれと君詮秀が佞辯を感すれ
法士の望を果ししもの移る鎌倉を怨む逆心を腰りの少くくと我定を
患ひ屢法をもくすれ詮秀を憎む讒言を挿く退けんとす。
爾れども我は一頁の失るるれが必と近日の鎌倉おアはるる。その村
家板と穢奸は一色を助重お討し小栗が家を再命さるるとゆへけら
上人をとらぬ二人ののの感謝してやとす相公斯いみじき仁心の在るお
我門碎骨も骨も忠舟山の妖怪を亡し姫君が恙なく棄れし還

此鴻恩を報ひ申さん前あ相公自ら岩舟山に赴きなすらん
 定め多く我々小令し多く折るく不ぞえのゆへ。と云ふまゝ。上人も傳ひ爾
 り。まゝと薦むる。持朝の裡に想ふ。我昨日岩舟山にて妖怪を騙
 されだ。云甲斐多相あなる。再び彼山に行きぬ。隠病をの
 云まんと生涯の恥辱此ら。と云ふ。又。回意々。二人の老の
 処い。と。勇ま。其心は任ん。と。弓矢と。名こそ惜れ
 ま。妖怪を騙されを恐れ再び彼山に行か。誹謗を受へ。惜
 る。前小約束せ。我を。山鬼。上。幸ひ。と
 り。二人の持朝の。命。我。朋輩
 を。彼。赴く。準備あれ。次の間。對ひ池の庄司を
 下の風。加。岡。の。持朝の。見。今夜直舟

岩舟山に赴くんと。其射常阿上人持朝を止め。曰。白。人跡
 岩舟山。夜。乗。行。石。淵。臨。薪。負。火。故
 び。明。且。行。上。今。又。我。持朝。前。小。約束
 女性。姿。扮。打。九。人。の。酒。二。樽。と。大。十。足。と。別。は。五。色。の。猪。は。麻。繩。を。隠。し
 これを。行。下。と。い。は。い。の。行。う。整。お。き。人。袖。の。裡。より。二。の。囊。を
 取。出。し。是。を。持朝。と。云。ふ。云。山。上。至。り。ま。ず。身。二。の。囊。を。披。け。る。人
 做。る。を。か。り。紙。書。お。し。の。姫。人。子。遭。ひ。も。ひ。て。后。身。二。の。囊。を。披。き。り。その
 後。の。隙。を。速。あ。せ。り。車。に。望。ま。んと。及。び。身。三。の。囊。を。解。ひ。て。え
 り。人。妖。鬼。を。討。む。の。術。を。記。し。付。是。り。此。三。囊。の。謀。を。疑。ひ。て。用。ひ。ぬ。る
 容易。妖。鬼。を。討。娘。人。を。恙。り。傳。ひ。還。り。ま。さ。じ。り。疑。念。を。起。し。ま。り。ぬ
 心。危。く。め。り。んと。父。の。ゆ。り。持朝。講。へ。三。の。囊。を。受。納。め。り。感。謝。を。述

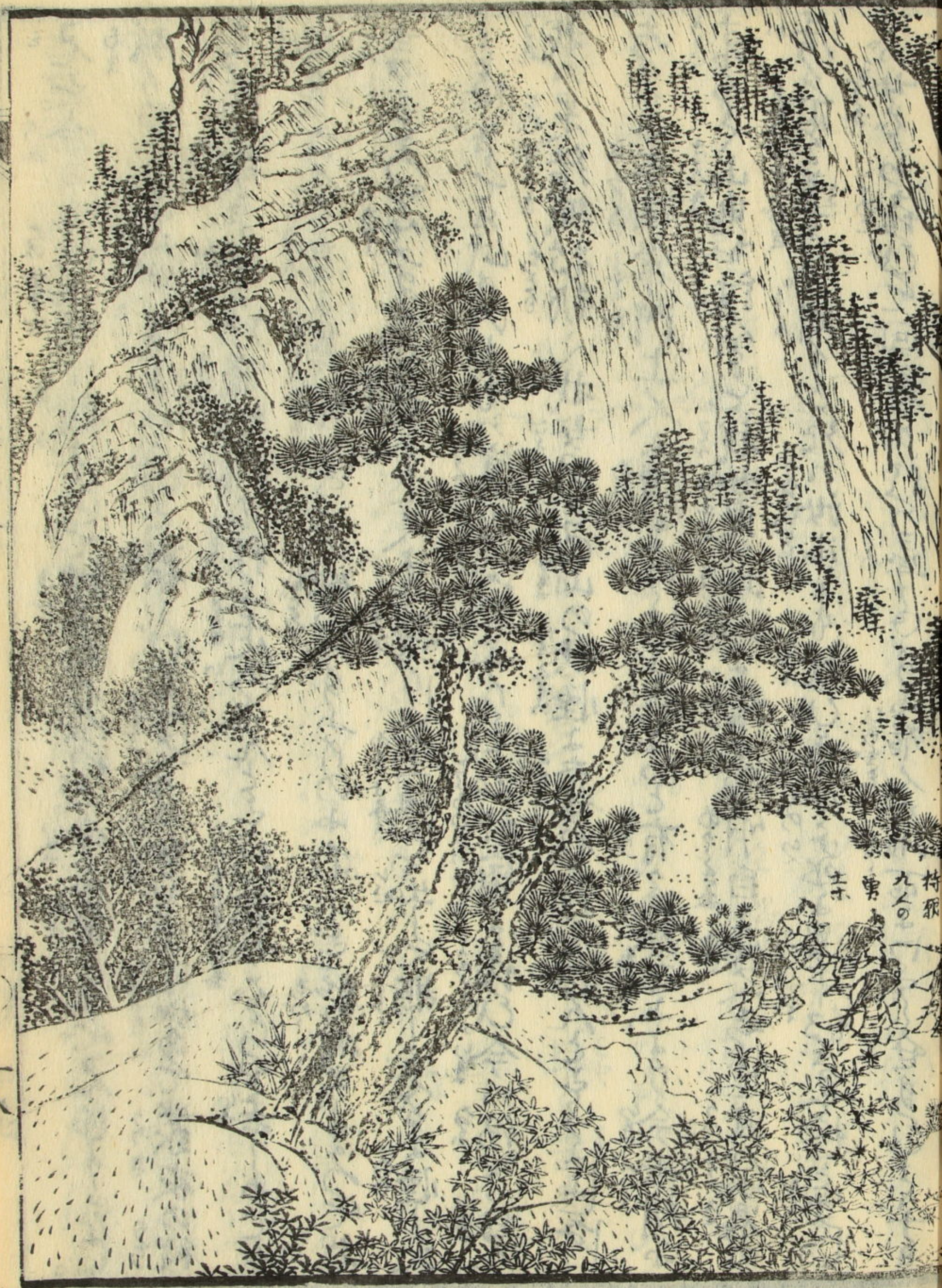
九人の物を獲て城中に還り。これを篤く食ふ。さて其後三日も過ぎ。上人の教の物を九人の人々も持てあせ舟山に赴き。池庄司をにね。九人の門へ持翫が主の力を助けて一色を行く。あせ家を再興させんと。あせを以て感佩し。これが恩を報はん。持翫も従ひ。妖鬼を討んと。意気雄々として山を上りぬ。持翫の山上に至り。前日漏りしれ。処を尋ねれど。所なく。おりのあせもなし。尚四方を尋ねり。ふ。そのく溪に細流あり。水深く。七瀬をきき。九人の門これを以て側あり。大木の根を引抜て巖間より。かけさき。七瀬も長橋のてく。けりて。清く。小易し。持翫その多力のやと。感佩。如斯く。この助を以て。山鬼を討つ。難く。じと。勇ま。けり。て。うち。渡さ。ば。遥く。女の。笑ひ。ど。よめ。声。笑へ。り。人々。怪し。み。ら。ず。山鬼の住家なる。へ。と。せ。口。を。踏。草。ま。す。り。率。して。率。上。り。て。と。心。を。と。り。今。秋。の。季。に。は。菊。花。爛。漫。と。咲。な。り。け。り。

香き。馥。郁。と。り。せ。り。緑。水。と。青。き。毛。纏。を。敷。く。ら。が。ど。し。嶺。南。の。茶。も。斯。や。む。り。え。と。れ。り。か。勿。ち。東。の。方。に。石。門。を。入。る。持。翫。門。の。下。に。至。り。て。ら。ち。け。先。景。を。定。規。り。て。数。十。人。の。女。ら。を。見。し。き。衣。裳。を。穿。ぎ。舞。妓。ひ。く。戲。し。居。り。持。翫。人。々。對。ひ。此。亦。を。妖。鬼。の。住。家。と。云。ふ。へ。し。や。上。人。の。身。一。の。囊。を。披。き。入。り。と。こ。を。入。り。ひ。く。れ。を。女。と。見。り。持。翫。の。門。の。外。に。い。ま。は。修。り。波。が。裡。より。出。り。同。り。の。あ。せ。人。其。耐。爾。と。い。ふ。と。九。人。の。門。の。隙。に。知。じ。び。く。と。委。し。書。写。す。あ。せ。は。く。と。て。其。こ。ろ。も。持。翫。原。来。女。姿。に。持。打。た。れ。が。世。が。衣。ら。ち。被。け。石。門。の。り。も。は。は。き。居。り。に。付。程。より。三。四。人。の。女。を。と。り。ま。し。これ。を。え。何。故。此。に。入。る。か。と。問。ひ。同。持。翫。女。の。声。も。似。せ。奴。が。柵。は。姫。人。の。か。鬼。神。も。や。邪。崇。を。ん。去。と。り。家。出。し。ぬ。ひ。に。去。向。を。知。ら。ず。悲。し。き。ま。し。四。方。を。索。め。れ。ど。影。も。な。し。

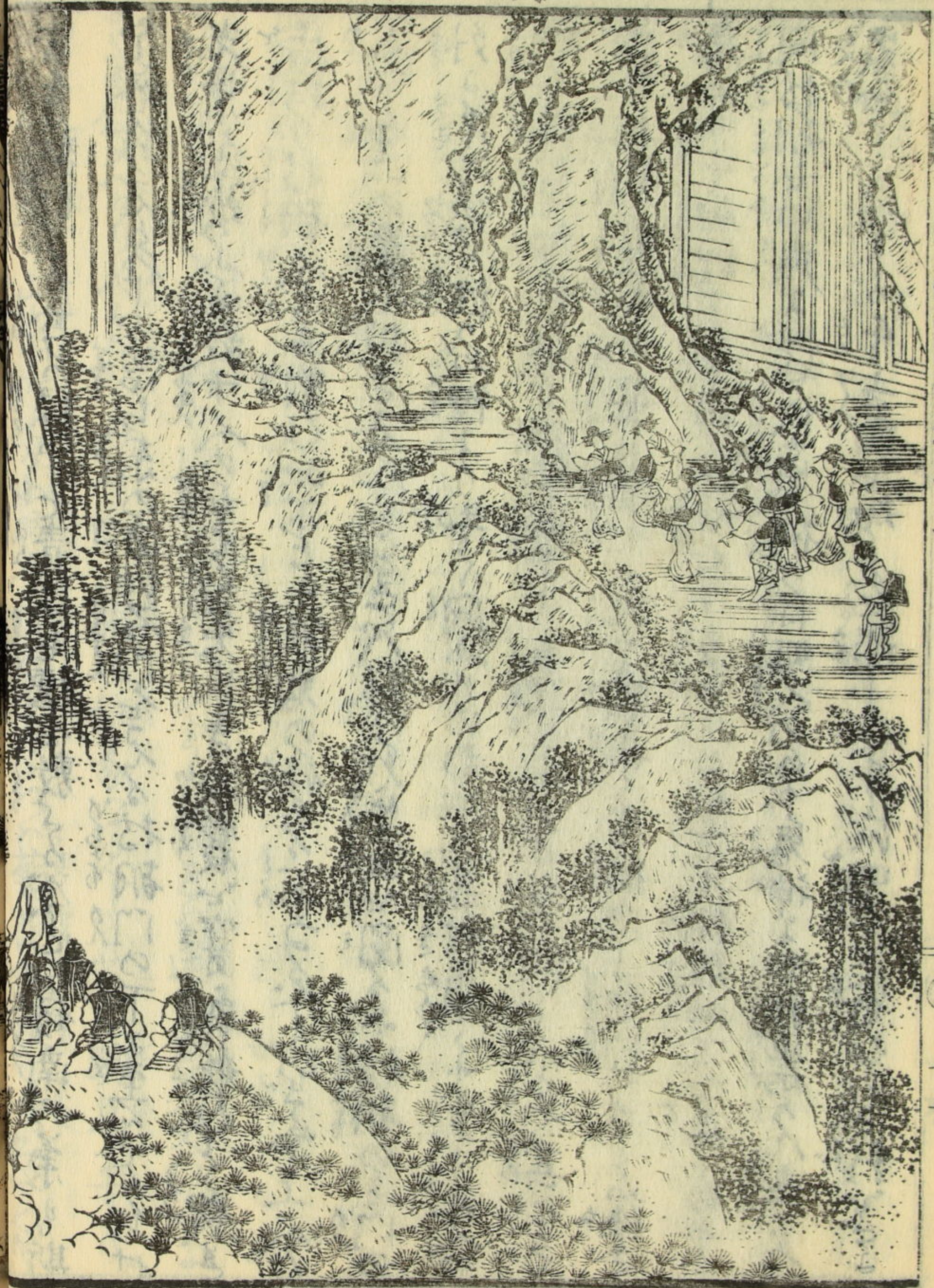
持翫の門の隙に知じびく

十六

群 九雄と 持て 再び 舟越山 列



持て 九人の 舟



小糸巻之七

十七

又今日も此山路を朝よりして搜索をせられと今に至るまで見ゆすはし
 解のこのふかき嘆きいと哀げば女も不意めて蒙夜の程
 をさし取き驚るに慌忙門の程を走入んとお朝女を幸あてと
 悪りまんと其裾をさうへ驚馬あつりのゆあごと勢付とまつて我
 言とつて女も人と密の上人より授けし宝珠を知て照らすは怪し
 とほしさてけりぬものも冥の人ありりと秘に密にまじり今に何ぞ包ん
 我は是結城お朝我女見と山の妖怪は奈れこれをはんとするはは
 ちつふ不圖常阿上人は遭すおじと有るはふふより今世所お
 ちつふ山鬼を討んと我女見と此山は居るや明白は入るは且山鬼の
 居るふ導線爾とたは汝もも救ひて女も必し還しはせとせとせ
 女をらまじびて回急たは尋ひぬる姫人の此山よりつてせむひと十日

ちつりのあも成をん山鬼が心仕りまはげ休がゆゑお彼も縛めとせりあ
 道はひてんせはわらさざと石門の程は誘ふ其裏度中りして堂のごじ
 ちつり行よの小屋舟至りぬ四方を建てて裡小園とさつり舟おや
 糸を福の床に上ふ人の近きてこれをとるおはつらもなれ女見いと
 嬉しと声を揚げんと女見これを着てまどりて割一早く去る人と
 いふお朝由あることと其室を生とて前にはひ一女さうおきるは姫人
 も奴家も此山を奈れりるの久しにりぬの十年不及ぶもあり
 此山の鬼神女を好む人の婦女の姿目よれあねば奈何は置とも奈れひ
 これと嬉しとせむせり善鬼神の心お意せむはりのあねば或十日或十三
 四日間縛る懲りて尚それともお任せざるの生おがその膳を
 酒小漫してこれを飲これ後氣の膳なれば足を腰とらるは精氣

元冥して神通のよう坊よりと喜べり相公今速に姫人を救ひまらんを
 数百の兵を將く有りまふとも鬼神の神通判りまふこと新まじ姫人
 ちの奴家も們をも救ひまらんとならば美酒と大とを運りまふこと新まじ
 裡に麻繩を繋いで是とまらば我く相織りて鬼神を殺さん術を倣へ今
 鬼神化行せり然れども其眷属あま多し怪しむらむ月の方の害をまらん
 云ふ人只今まへすわじしる物と準備して再び有りまふと期す午の刻より
 後こそよけれ一日二日の間は謀を用ひざれば姫人の命を危くす
 あへとまへへお初を首を領受し急ぎ石門の村に出る九人の們は初
 のへ洞の裡を出るを不審ありふ目今出まじしと相遭りて互ふ
 喜ひ初洞の中光景を説きまふ此村の二の裏を披きまんとて
 これを披き聞かぬらるの云はるごとく露差のまれば懐て携り酒と

大と指とをり末の下判とありまらるを往て石門の前お初を
 びく女の姿お初打密に安んじまへ前の女再ひ出まれば初物達の如く
 驚くまらりしと女をばびて云や鬼神酒を好きて飲と限す酔と云
 必まのれが力お漫り我をばじめ眷属おまんとて五色のまふりて
 手足を四方お縛さし一回刃を執りて結すくお断く四方お散れりま
 これをりて樂みとま今日も此酒をえがまひ飲りて碎りて付まら此結の
 裡にけ麻繩を繋いで縛りて鬼神力おまるとも俄に断えはし爾のまら
 一の難きとあり鬼神の渾身鉄のまらりる利力を用ゆるも刺りかじ
 相公よこれをお思ひまへとあるお初これをお思ひて案に必しが勿らあり
 牛とま三の裏を披きこれを聞かぬ鬼神の身軀鉄石のごとく兵三言
 用ゆる必しこれを討んとせむ我まらる秘符を投擲へ其中まらる

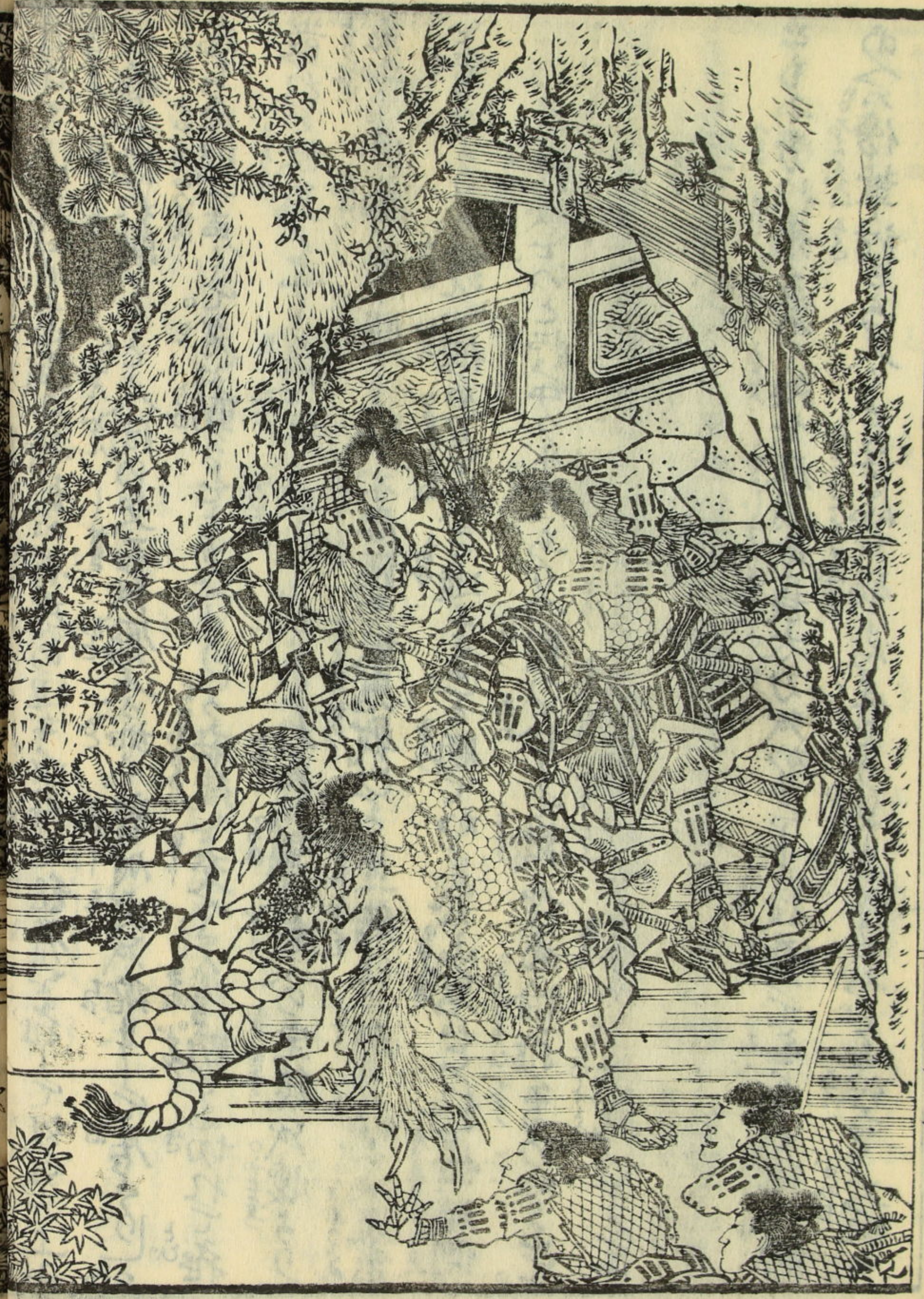
皮内和らぎ刀又を絶まき泥を刺がらうか人化の爾くまじと云記より。
 杉柄がきりたくまじび九人の們ゆ三の策を示一人を忍びた下を同
 女のゆ彼雨の大巖の洞あ鬼神着属赤が飲食を務る亦その奥
 まりころふ忍びまじむ。社陰れり人々喜ひはととて九人の們を
 其宅宛に忍び相圖をむ速お斬くゆと物。杉柄の女の生他て女
 からの中に難り携へ来る酒と大とを妖鬼の居る床の赤も居まき行
 へらお申の下刺ともおりの比及西の方より結緒るんどのたりの習くと
 飛身り洞の裏に入りしが斬射して大漢子白綾の小袖を穿腰小
 大を力と佩きまじりて彼床の上まゆと着属とあり怪しりの附従て
 床の赤も居並ひる妖鬼大と酒とをていとまじむるおりちよて大を
 製食ひ酒を吞とまじりは着属赤も分らぬ酔へ九かなると云お

女をらま對ひ今日酒肉を他方より来はると同く女を杉柄を指して
 彼雨はけら女房は山近きやりの福老の妻も昨夜盗賊忍び入る賊室
 酒肉とも春あれは此山は得ひまて賊室のまをりて妻は酒肉の捨おして
 去り石門の下ま嘆に居る着あまりの痛やく且酒肉のゆらると大主
 おまもままじく。そに入おきをとりねと信しやまへる妖鬼うちまじよも
 討らひまじ。その女房不使のりのまら透りといふ女をら一般より
 悲しめたまりの山焼まじ。ひれ被ま嘆き居る此雨も近はけり酒宴の
 真自ら醒る料理を失ふま至らん彼が牙の子細を問人とおはま明日静
 中う小同ま爾の射ハ酒宴の妨げもままを彼もを安はぬむれが詳うお
 事情を知しめまんとしあま妖鬼臨臥はホクいふ雨道行くと尚矢杯を
 傾けて十二分の酔をまじぬ着属もま小酔く其席をまうでり女をら

其光系と密々ひ着く時こそよけれと追み寄る。大王今日も力を出し自を
 多人とけくかたくな妖鬼呵くと笑ひ今自のよく縛りま常の如くしてと奥
 なれどと云はく仰さぬお即と女をさらけ持朝の雫一五色の結は麻縄と後
 々後をりて手足と縛り石の床に堅く結付持朝は乍視されぬと洞乃
 外に出と蒙衣とらつて相圖とらむ九人の們一般お取れお持朝の跡には
 洞の裡に走入り妖鬼とれ次て驚る急ぎ身を動じ縄と断んとさしと解
 こと社のまき大まふ怒り叫ぶ声雷の如し此声とてや数百の猿猴集ひあり
 人々火を礫と打ち木片とりて討てかき九人の們持朝は對ひ此畜生
 を我くままうし多ひ相ら妖鬼を討多人と勧め群ある猿猴お敬洞はお
 々大木と引振拂ふあり刀と捨て切もあり勢ひおほうせ討てと一盞茶付
 小數十正次討てるうは残る猿猴ハ恐まじ岩石樹木の存らなくおめか

すあく逃失より其間お持朝の石床の辺お近付て秘符をばして妖鬼がよ
 投擲が恐れ戦くこと人間の矢石が厭か如く暫時身を縮まして居りしが
 忽ち大喝一声と身を動くととえ入りしう麻縄を交へる縮断る切れて飛
 散れ妖鬼を身と記逃走んととせ処は豫て教への宝鏡が懐より
 五半は挿し照らされお不思議や妖鬼戦ひくま縮はく走りぬと此光系
 を着るよりのも鏡を仮め刀を抜き逃とまはと斬てかきお山鬼おこれを偷眼側
 めあり鉄杖をいと打中りお打ありの對ひ合と鏡をぬけ恰飛鳥の如くお
 待遇をてえへる処へ九人の們猿猴を退退今此お入るしが此戦ひをえ
 よりも四方よりおつとり困我討多人と競ひかきおさしも小猛き妖怪の心
 ともお勞れ果まめく処を庄司助長太刀がからとと投棄てて手と組お押
 めへ傍輩討と多人くと互に心気励んまおの只とりのするやとめあく大地お

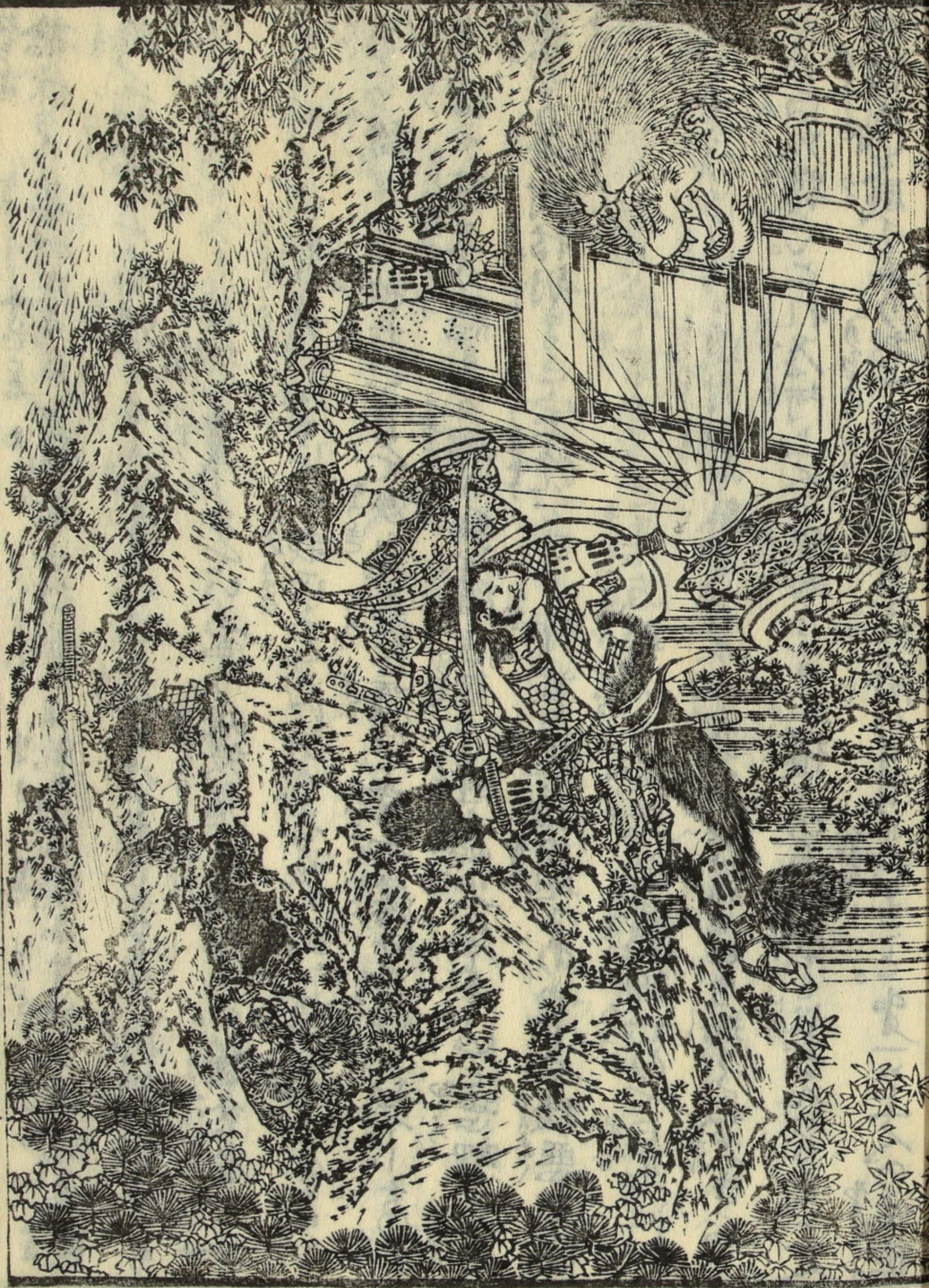
常阿の
法力
持朝と



小野卷之廿二

九二

鏡と持
持朝と
其人の
御新



小野卷之廿二

九二

拾伏る。其の所庄司を揚げ。やよ持朝は。妖鬼を既ふけ捕は。持朝も牽
 後ふ此下。やよ持朝は。妖鬼を既ふけ捕は。持朝も牽
 生捕りの。其功を賞。さるる。此妖鬼退治の。鎌倉の命
 小も何ら。私のため。彼は。我に。あり。山を。我
 自ら。秘符。妖鬼。首打。怪。その首
 宇宙。怒。血を。吐息。恐却。先
 景。押。檀。旭。猛悪。妖
 妖鬼。首。地上。落。眼。死。鬼神。目
 人。勇。近。熟。幾。知。大
 なる。白。猿。阿。上。の。説。知。む。獲。と。妖。足。え。り。と。上
 の。博。識。と。感。ず。持。朝。の。法。徳。

身。二。九。人。の。力。よ。り。と。感。謝。と。後。と。び。ま。り。持。朝。を
 白。小。舟。と。幸。に。恙。な。く。あ。り。う。の。父。子。と。飲。び。の。對。面。に
 前。母。業。肉。に。る。女。も。も。出。て。ま。り。せ。勞。以。謝。其。身。れ。ら。人。を
 同。み。る。良。家。の。婦。女。な。り。持。朝。と。言。を。傳。へ。行。ひ。く。その。家。に。母
 あ。り。還。ら。ま。じ。と。あ。り。し。う。み。好。喜。ひ。く。恩。を。謝。し。り。此。時。に。園。主。が。郎
 進。み。出。て。ま。り。か。ら。妖。鬼。死。す。も。よ。く。祟。り。を。な。さ。り。の。早。く。焼。き。て
 邪。を。拂。ひ。と。流。し。れ。ば。室。爾。こ。も。ま。り。と。て。妖。鬼。の。屍。と。春。属
 亦。が。屍。と。一。所。に。あ。せ。鬼。の。貯。は。飲。食。調。度。を。困。り。ふ。積。か。さ。て
 こ。も。火。火。け。洞。の。中。に。焼。け。し。白。糸。姫。を。と。り。女。を。引。俱。し。く
 九。人。の。人。と。俱。母。岩。舟。山。を。下。り。常。阿。上。人。の。旅。宿。ま。至。り。妖。鬼。容。易。に
 先。は。先。景。が。詳。に。説。話。り。恩。を。謝。し。ら。ば。常。阿。上。人。も。こ。も。好。喜。み。か。と

かまりの形。斯く持朝と九人の人々が労を謝し、今ぐて主人小栗女重宿志を
 遂んとする力をばして今日此恩を報ぐべし。此奉とや小栗夫婦は告げし
 云はく城中へ入城せりて太刀馬とりのはしこれを下程とせられ九人の御恩を
 謝し相云の好意のほどをいかに助すまはせ告げし喜ばしめとせられ
 旅祭とせられ常阿上人も我の諸國を控行の身なり此地方より居人の
 宗祖の意思も差なれば是より奥の方へ赴くと旅の宿りせしちりしが
 持朝とて火止とせられと止しとて旅の費不亮多とて令浪がふゆれば一
 不住の此方より一鋒の外よりとせられとて何とて需んととて火止とて受が
 さぬぐふ止むれと上人今らうくお回意がななく杖を拂ひ東次さし
 立出まが九人の人も名残を惜めとて支んが畏くして其殿影を伏拜し
 熊野へ赴くと持朝も眼を西とせりてとて旅費ぬ持朝の上人と九人の
 人の後影のうへぬまてえ送りぬ娘をばしめ女をばし復して城中かかると
 北れ方らもはらり上下男女の家臣亦白糸姫の恙なく還るを欲
 奉死しとせりての懸し異形に成さめたりとて悦しとせりて
 すみの住む女もその家くお送り還りしけりて国民皆く悦し持朝
 が仁常阿上人の徳九雄の勇を賞し喜ばれりとのりけりて

